



第83巻 第2号
 年4回発行
 社会福祉法人 慈生会
 〒165-0022
 東京都中野区江古田3-15-2
 TEL 03-3387-5567
<http://www.jiseikai.jp>
 振替口座 ベタニアの家
 00170-6-15317

少子高齢化が進む中で

慈生会は？

薄井 康紀

昨年四月に国立社会保障・人口問題研究所から、新しい人口推計が公表され、十二月には地域別の見直しも示されました。低い出生率の下で、人口の減少と少子高齢化がさらに進むことが見込まれています。また、今後は高齢者人口の増加もさることながら、働く世代の人口が大きく減少していくことが不可避な状況にあります。

首都圏で施設・事業を展開する慈生会はどう行動していけばいいのでしょうか。慈生会の理念を守りながら、人手不足時代に対応した業務改善や働きやすい職場環境づくりが待たなしとされていると考えます。

慈生会の定款には、「キリスト教の理念に基づき、個人の尊厳を保持

しつつ、多様な福祉サービスがその利用者の意向を尊重して総合的に提供されるよう創意工夫する…」とあります。ここにはいくつかキーワードがあります。

キリスト教の理念―「生きることは愛すること」「愛することは行うこと」と言われたフロジャク神父の言葉を胸に刻んで、慈生会の誓いを実践していくことに尽きると思いますが、キリスト教信者でない方にも、愛という言葉は共有していただけるものと考えます。

多様な福祉サービス―慈生会は、三つの拠点で、様々な方を対象に施設・事業を運営しています。それだけにそれぞれが抱える課題も異なります。

まずは、各施設においてそのめざすところ、取り組みの方向を共有することが大切です。それも上からでは

なく、職員が、自発的に、どうすれば施設の運営がうまくいくか、利用者のためになるか、サービスが厚くても人材面、資金面で支え続けることができなければ利用者に迷惑をかけることになりすからそこも意識して、自ら考えていく(「創意工夫」)。

そして、職種や雇用の形態を超えてそれを共有し、確立することが求められると思います。

また、その実践に当たっては、慈生会には多くの職種の多くの職員がいますが、お互いにリスクすることが大切だと思います。「互いに愛し合いなさい」(ヨハネ15・12)は聖書の有名な言葉ですが、まずはお互いにリスクとして接すること、その第一歩だと考えます。

新人口推計によると、六十五歳以上人口のピークを迎えるのは二〇四三年、この二十年後までの社会において、様々な仕事に従事する人の数はもうほぼ決まっております。各分野で人材の不足が深刻になってきます。このような中で、利用者に必要なサービスを提供し続けるためには、ケアは人の手による部分が大いですが、施設運営において変えるところは

胆に変えることが必要だと考えます。ラインホルド・ニーバーの祈りの言葉に「変えられないものを受け容れる心の静けさと、変えられるものを変える勇氣と、その両者を見分ける英知を」とあります。

私たちにとって変えられないものはフロジャク神父が説かれた理念で、これからも熱い心で守っていかねければなりません。ただ、一方で変える勇氣も必要となると考えます。

各施設において方向を合わせていくことを縦軸として、慈生会全体としてその理念に向かって各施設が相互に協力する(横串)ことで利用者、地域にとつての役割を果たしていくたらしめます。それはベタニアの家という一つの家として働いていくということでもあります。福祉・医療の連携や地域包括ケアの確立が求められています。慈生会は地域においてそれを推進していくポテンシャルを持っていると思います。

慈生会がその役割を果たしているよう、ともに考え取り組みましょう。

(慈生会常務理事)

ベトレーム学園
小学生スキー行事

渡部 亜衣

令和六年一月二八〜二九日、ベトレーム学園の小学生十七名と共に新潟の舞子スノーリゾートにてスキー、スノーボードをしてきました。コロナが明けて久しぶりの大人数での宿泊行事となりました。

大型バスでの移動中はクイズ大会をしたり、バスの窓から雪景色が見えて来ると「雪だ〜。」と興奮する姿も見られ普段目に見えない光景と実際に雪で遊べることに皆心躍らせました。スノーボードやスキーに挑戦した児童は、転びながらも少しずつ楽しんで滑れるようになりました。



帰る時間が近づくと、「もう少し滑りたかった」と言う子もいました。自分でスノーボードを運んだり、普段と違う動きで疲れも見せていましたが、それ以上の楽しみがあったようです。

雪遊びをした児童は、思い思いの雪だるま作り、ソリで一斉に滑って競争、雪合戦等をして楽しみました。誰も踏み入れていない積雪に大の字で倒れてみたり、雪の冷たさや感触を肌で感じられる体験となったと思います。



宿泊先では年上の子が年下の子をお世話してあげたり、生活の場を離れてそれぞれ自分の事を頑張る姿も見られました。児童も職員も全力で雪を楽しみ、頑張った二日間となりました。

(ベトレーム学園保育士)

何気ない日常を大切に
(久しぶりの帰省や外泊)

田村 綾

コロナが5類になって以降、さまざまな行事やイベントが制限なしに実施されるようになり、以前の日常を取り戻しつつあるなか、マ・メゾン光星の年末年始も数年ぶりに期間の制限がない帰省が実施されました。朝からご家族の到着を心待ちに、ソワソワとする方、ご家族へのお土産を手におしゃれな外出着への着替えを早々に済ませて準備する方：利用者の方々のご家族への想い、自宅へ帰省する嬉しさが伝わってきます。利用者と顔を合わせたご家族の皆さんも笑顔で嬉しそう！帰省から戻られた後にもご自宅で食べた物、ご家族とのお話など利用者の方々から次々にお話を聞くことができ、のんびりと楽しいお正月を過ごされたことが



伝わってきました。また1月には各ファミリー単位で

日帰り温泉や買い物といった外出の機会にも恵まれました。ランチ付きの温泉外出や衣類や本などの買い物は、外出の機会がそう多くはない利用者の方々にとって、これまた大きな楽しみの一つです。めぐみファミリーでは小グループではありましたが、帰省の無い方を中心に那須温泉への一泊温泉旅行にも行くことができました。念願かなっての数年ぶりの旅行は利用者よりも私達職員の方が力が入り、どこに行き、何を食べようかとワクワクしながら企画をしました。広い大浴場で温泉につかり、非日常を味わいながら「旅行はいいねえ」とご利用者と一緒にまったり・今年には以前のように外出や旅行を皆で楽しめそう！と今から心待ちにしています。



コロナ以前の日常が戻ってきたいま、当たり前前にできていたことに感謝し、楽しいひとときと同じくらい普段の何気ない日常を大切にしながら利用者と共に過ごしていきたいと思えます。

(マ・メゾン光星 支援課長)

春の夏みかん狩り

シスター 國定光恵

ベタニア修道女会の敷地内には、先輩シスターが楽しみながら育てた夏みかんの木が七本あり、大きくなって毎年実をつけています。二月中旬から三月初旬になると、すっかり色づいた黄金色の実が、青空を背に美しく輝き出します。

たわわに実をつけて私たちが喜びさせてくれる、この神の恵みと収穫の喜びを、私たちだけでなく、みんなと一緒に分かち合えたらどんなにか楽しいでしょう、と考えるようになったのは、今から三年前の二〇二一年のことでした。

協力して下さる方を募り、必要な準備と打ち合わせを重ね、いよいよ第一回目のみかん狩りが二〇二二年三月一日に始まりました。

この日参加してくださった方は、ご近所の皆様をはじめ、徳田教会の信徒の皆様、日曜学校の子どもたちと保護者の皆様、神父様と神学生、慈生会職員、そして修道会のシスターたちでした。初めての行事でしたが、無事に一日を過ごすことが出来たこと、色々な人との交流が生まれ、楽しく思い出深い一日をいただいたことは神の



大きなお恵みでした。

今年当初予定していた二月四日が雪のため順延となったというハプニングがありました。二月十一日と十八日(日)のミサ後十一時半から無事収穫することができました。

日曜学校の子どもたちには事前専門家の方から、みかんの木の棘に注意することや、実の外し方などを教えていただきました。



ご存じのように、実をつける木は、「なり年」と「不なり年」が交互に現れるとのこと。お陰様で今年はお本木が「なり年」でしたので、みかん狩りに参加されなかった方にもお届けすることが出来ました。



きっと今頃は、あちらこちらで、おいしいママレードが出来上がっていることでしょう。皆様、今年もご協力をありがとうございます。 (ベタニア宣教センター)

新年度を迎えて思い新たに

坂本 真理

気持ちを引き締まる年度初めの4月を迎えました。今年度は医療・介護・障害福祉の報酬改定が同時に行われる「トリプル改定」の年であります。

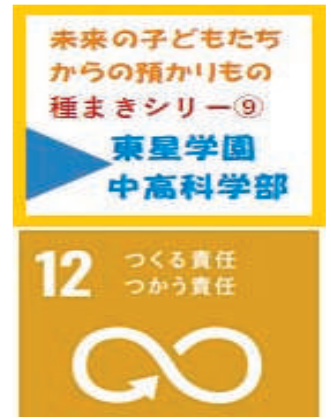
制度改正や報酬改定がありますと、契約書や重要事項説明書も変更しなければなりません。2月、3月は事業計画書の作成、予算の作成、事業報告書の作成等々があり、通常業務を行いながらの事ですので、何せ時間が足りません。更にこの「瑠璃草」の原稿書きがあり、頭から湯気が出そうになっていました。原稿書きに行き詰まり、はっと閃いたのが、「こういう忙しい時をフロッジャク神父様はどう切り抜けたのかしら」という思いです。

(あとから考えると自身とフロッジャク神父様の忙しさを同様に考えるのは図々しいのですが・・・)そして、目に入ったのは机の上にあった「フロッジャク神父の生涯」という本です。その中には神父様が複数の仕事を持ち、超多忙な中どのように切り抜けていたのかが書かれておりました。なんと帳簿に向かったまま居眠りするのを防ぐため足の高い机を古道具

屋さんより買ってきて、立ったまま一晩中帳簿つけをされていたそうです。更には頭が痛むと氷嚢を手拭いで額に縛り付けていたとの事です。これを読み私は、フロッジャク神父様が抱えてらした事の足元にも及ばない量の仕事で心の中でぶつくさ言っていた事を恥じました。そして、仕事があるという事に対して改めて感謝の気持ちが生じて参りました。

2020年1月からのコロナウイルス流行を境にして、私達の生活や気持ちには何かしらの変化があったと思います。対面や交流に制限がかかり、一方でオンライン化が進み、仕事の形も変わりました。そのような中、福祉の仕事はやはり人との関りが基本になっておりますので、大きく変わらない面もあります。地域では高齢化に伴い、今までと同じく老々介護のこと、認知症のこと、ヤングケアラーやビジネスケアラーの事など様々なケースが見受けられます。

フロッジャク神父様は、「社会事業の目的は、病によってか、その他の事由によってか、とにかく孤独な人の傍にいてあげる事です。」と仰っています。この意思を頭の中に置いて、今後も地域に貢献できる仕事を続けていきたいと思えます。 (中野トータルサポートセンター 地域支援グループ長)



東星学園中学校・高等学校の科学部におけるSDGsの取り組みをご紹介します。

部活内でリサイクルについて調べてみると、日本におけるプラスチックのリサイクルは、「サーマルリサイクル」という熱エネルギーとしての再利用の割合が62%と高く、さらここ数年少しずつ上昇していることがわかりました。プラスチック資源として「マテリアルリサイクル」されている割合が21%と低いこと、国内でのプラスチック生産量が増加傾向にあることを考えると、まだプラスチックとして活用できる余地があるものをいきなり燃料にしてしまうことに対して部員から疑問が生じました。

そこで部活内の活動でプラスチックのマテリアルリサイクルを行うことができないか会議が開かれました。そして出てきたのがペットボトルキャップを利用する案です。プラスチックの中でもペットボトルキャップは生徒にとってもなじみ

が深く、形や大きさも比較的均一で加工しやすいという利点があります。コロナ以前はペットボトルキャップを回収し発展途上国にワクチンを送るというプロジェクトも多く見られました。ペットボトルキャップの原料であるポリプロピレンの買い取り価格の下落にもなっており、そういった活動も下火になってきたように感じます。

今回「自分たちの手でペットボトルキャップに工業製品としての新たな価値をつけることができれば、ただ回収したものを業者に預けて終わりとするのではなく、その売り上げでワクチンを買い、実際に病気で苦しんでいる子どもたちに届けることができるといいたくない。」直接届けること、具体的



に実現可能かはわかりませんが、環境のことを考える事から、世の中で小さくされた人々のことへと考えを広げることができたこと、生徒たちからそういった言葉が出てきたことが嬉しかったです。

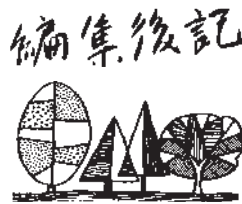
次回も東星学園の取り組みと価値のある情報を合わせて発信していきたいと思えます。

(記・科学部顧問 中尾)

訃報
シスターレオナルダ 富田 満壽子



一九四一年十二月三日 生
一九七〇年十月十七日 立誓願
二〇二四年二月十二日 帰天
ベタニア修道女会



令和五年度、振り返ってみると行事が、ほぼコロナ前に近い状態で実施できるようになってきた。その中で十二月下旬に行われた児童養護施設対抗の大会に参加できた女子バレーボールチームだが、大会が無かった時でも欠かさなかった毎週一回の練習の成果も出て、三戦全勝という嬉しい結果を残すことができた。継続は力なり。

今年も春がやってきます。カトリックの暦では、折しも3月31日が復活祭。翌日から新年度が始まるとは素晴らしい偶然です。新たな気持ちで自分を振り返り、自分に何ができ

(関 広宣)

るか、周りの皆さんと共に何をしていけるのか。
みんなでひとつひとつを大切に、積み上げていける春にしていきたいと思えます。皆さま本年度もよろしくお願いいたします。

(杉山 智和)

春。自然界は新しいいのちの喜びに輝いています。二月末の二日続きの大風の日から時々思い起す満開の河津桜の姿。強風に吹きまわられても散ることなく、なすがまま身を任せ、静かな忍耐の姿。どんなところにも敷居を越えたところにはそよ風の吹く静かな光景が広がっているのかな？ 私たちの救いのためにご自身のすべてを献げ、今、復活し、静かに永遠のいのちを現わしてください。静かに身を任せ、新年度スタート。

(Sr中野 利恵)

前回の編集後記でベタニアホームの面会をコロナ禍前に戻すお約束したところでしたが、1月末から約1カ月、コロナのクラスターになってしまいました。職員みんなが十分に注意をしていたはずなのに、しばらくは制限付きの面会になってしまいます。新年度から自由な面会をと思っていました。なかなか平穏な日常にならないようです。新年度は「新たな気持ちで前向きに」と思っています。

(中村 英男)